

今月のみことば 2019年2月

「それとも、神のいつくしみ深さがあなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かないつくしみと忍耐と寛容を軽んじているのですか。」（ローマ人への手紙2章4節）

冬の川で溺れた少年

粉雪の舞うドイツ、バイエルンのイン川の川岸で、子どもたちがインディアンごっこをして遊んでいたが、その中に4歳になるひ弱な男の子がいた。年の割に体格が貧弱で分厚いメガネをかけていた。

自分も、勇ましい「戦闘」に加わろうと、意を決して走り出したが、途中で転び、土手を転がり落ちてしまった。メガネは空を切って飛び、彼は薄い氷の張った川へ落ちてしまった。彼は泳げなかったので、下流に流されていくほかはなかった。もはや死ぬことは確実であった。

「だれか、助けて！」という、遊び仲間の悲痛な声をヨハン・キューベルガーという5歳の少年が、聞きつけ、氷の浮かぶ川に飛び込み、その少年を安全な川岸にまで引き揚げた。

地元の新聞はヨハン少年の勇敢な行為を大々的に称えた。

後年、この勇敢な少年が成人して神父になったことに誰も驚かなかった。キューベルガーは自分の残りの人生を、困窮と困難の中にいる人々に捧げる覚悟でいたのである。

ところが、あの遊び友達を救ったという出来事は、ヨハンをその死ぬ日まで悩ませることになった。同じく神父であった友人、マックス・トレンメルによれば、キューベルガー神父は1894年のあの冬の出来事のことが頭から離れず、何日も何日も眠れぬ夜を過ごした、という。

ヨハン少年は成人して神に仕える人となったが、彼が救ったあの少年は、歴史上、最も悪魔的と言われる人物になってしまったのである。もし5歳のヨハン少年が川に飛び込む前に、ほんの一瞬でも、未来を覗き込むことができたなら、その場に立ちすくみ、川に飛び込むのを思いとどまったかもしれない。そうすれば、無数の、何百万とも言われる人々は、確かに恐怖と死を免れたことであろう。その少年の名前は、アドルフ・ヒトラーといった。

ヒトラーは子供時代にイン川のほとりでインディアンごっこをして遊んだことを何度も懐かしそうに回想している。しかし、自分があやうく溺れ死にそうになったことは決して口にできなかった。キリスト教の司祭になろうとしていた人物に命を救われたことが知れたら、「超人」としての総統、というナチスが作り上げた神話が台無しになってしまうからである。

ヨハン少年はアドルフを助けなければよかったのだろうか。誰一人、未来を予見できない以上、最善のことをしたヨハン少年は間違っていない。むしろ、ヒトラーが命を助けられたことを忘れ、否定したところこそ、悲劇の発端であった。

私たちも、何度となく神から危ういところを助けていただいたのではないだろうか。それでも、自分勝手な道に突き進むとしたら、「破壊と悲惨」(ローマ 3:16)が待っている。神の恵みをあなどることの恐ろしさは、その人だけではなく、周囲をも巻き込むことを、私たちは心に刻まなければならない。



冬のイン川



助けられた少年



キューベルガー神父